

クリフォード・ギアーツ(池本幸生訳)『インボリューション—内に向かう発展—』(NTT出版、2001年)**

はじめに

クリフォード・ギアーツ (Clifford Geertz : 1926–2006) は、アメリカの文化人類学者である。主な著作は、*The Religion of Java* (University of Chicago Press, 1960) や、*Local Knowledge : Further Essays in Interpretation Anthropology* (Basic Books, 1973 / 梶原景吾、小泉潤二、山下晋司、山下淑美訳『ローカル・ノレッジ—解釈人類学論集』、岩波書店、1991)、*The Interpretation of Cultures : Selected Essays* (Basic Books, 1973 / 吉田慎吾、柳川啓一、中牧弘充、板橋作美訳『文化の解釈学 (1・2)』、岩波書店、1987)、そして、*Negara : The Theatre State in Nineteenth-Century Bali* (Princeton University Press, 1980 / 小泉潤二訳『ヌガラ—19世紀バリの劇場国家』、みすず書房、1989)などが挙げられる。

今回、取り上げる『インボリューション—内に向かう発展—』(NTT出版、2001年、ISBN:4757140312) は、1963年に出版された原著の *Agricultural Involution : The Processes of Ecological Change in Indonesia* (『農業のインボリューション』)に加え、これに寄せられた批判等に対して1984年に書かれた“Culture and social change: the Indonesian case”(「文化と社会変容」)も収録されている。今回、書評を行うのは前者(以降『農業のインボリューション』と表記)であり、後者には触れない。『農業のインボリューション』は、ギアーツがマサチューセッツ工科大学 (MIT) 国際研究センターの支援で行われたプロジェクトの1つ、「インドネシア・フィールド・チーム¹⁾ (ルフス・ヘンドン指揮)」に参加する中で

得られた情報に基づいて書かれている²⁾。

なぜ、1963年に出版された本が2001年になってようやく日本語に翻訳されたのか。その答えはこの本に原洋之介³⁾が寄せた「今なぜギアーツの『インボリューション』か?」という部分に含まれている。

原は、『農業のインボリューション』が数世紀に渡るインドネシアの経済史、および社会生態学の作品であるとし、これはギアーツの出発点である社会人類学的作品だと述べている。そして、グローバル化が進む今日において学問分野にとらわれない「地域の総合的パースペクティブの構築を求めること」が地域研究に求められているため、後に述べるギアーツの生態学的アプローチを取り入れた研究が有効であると評価している。

ギアーツ自身は「日本語版への序文」で、「序章的な研究はそれ自身の人生を持つようになっていった⁴⁾」と述べ、自伝である *After the Fact : Two Countries, Four Decades, One Anthropologist* (1995)でジャワの研究に触れる必要性を感じなかったとしている。実際に、原も述べているように、自伝では『農業のインボリューション』について全く述べられていない。

訳者である池本幸生は「訳者あとがき」で、日本経済の閉塞感が「インボリューション」と類似していると述べ、また「インボリューション」や「貧困の共有」という概念は使ってみたくなる魅力があるため、これらが一人歩きし、都合の良いように解釈される場合もあるとしている⁵⁾。

この本は、一般的にギアーツの代表作とはい

* 中部大学大学院国際人間学研究科博士前期課程

** ISBN : 4757140312

い難いといえる。しかし、フィールドワークに片寄りがちな今日の途上国研究とは異なり、フィールドワークと植民地支配の歴史（先進国と途上国）の両方に目を向けているという点が大変興味深い。

今日の途上国を見つめるとき、かつての宗主国の影が色濃く残っている場合がある。そのため、植民地支配の歴史にも目を向ける必要があるのだ。

特に評者が注目したいのは、例えば、インドネシアのコーヒーやスリランカの紅茶栽培などであるが、これらと異なっているのが、ギアーツの注目しているオランダ植民地支配下のインドネシアでのサトウキビ栽培である。植民地支配下の強制栽培では、栽培に携わる現地住民を食べさせていくことが重要な問題となるが、インドネシアでサトウキビ栽培に携わった現地人はサトウキビと米をローテーションで栽培することによって、食糧の自給が可能であった。しかしギアーツは、このような農業集約的な産業のおかげで工業部門が発達できずに、インドネシア経済が停滞していたとしている。つまり、経済の停滞の根本的な原因がオランダの植民地支配にあるというのだ。

以下で、ギアーツのアプローチ方法と要点を詳しくみていこう。

1. 生態学的アプローチ

まず、原も注目している生態学的アプローチについてみると、ギアーツの主張は以下の通りまとめることができる。

ギアーツは、人類学の古いテーマの1つを「ヒトをその生活の場という背景を通してとらえること」であるとし、それを前提としている人類地理学と可能論とは異形の、人間また自然の相

互作用を研究するための、強力な分析枠組みを探究するために「生態」に注目している⁶⁾。

また、「文化」と「環境」に領域を分けて、それらが相互にどのような影響を与えているかを観察する人類地理学や可能論者のアプローチ（伝統的アプローチ）は細部まで議論できないとしており、生態学的アプローチでは「生態系」という枠組みを取り込むことで、より正確に定式化しようとしている⁷⁾。

生態系の概念は、「社会を構成する生物体とそれらを取り巻く環境の間の物質的相互依存関係を強調⁸⁾」し、生態系の研究はシステム内部の動向や発展、変化の様式を探ることであると述べている。

そして、ギアーツは「社会活動の領域的配置や、人間の規則性⁹⁾」ではなく、人間が組み込まれている外的生理機能¹⁰⁾の過程（process¹¹⁾）と、社会と文化の過程との関係に関心があると述べ、人間の共同体の構造を分析する際に生態学を排他的・包括的枠組みとして利用する還元論者との違いを明らかにしている¹²⁾。

2. 「内インドネシア」と「外インドネシア」

では、具体的にどのようにしてこの生態学的観点を用いているのであろうか。ギアーツは「生態」をインドネシアの主な農業形態を説明するために用いている。

そして、伝統的なインドネシア農業の2つの「システム」、サワ（sawah：水田）耕作と焼畑耕作に注目し、これらの耕作方法によってインドネシアを「内インドネシア」と「外インドネシア」に分けている。

また、人口密度・土地利用様式・農業生産性を、サワ耕作と焼畑耕作という2つのダイナミクスを持った生態系という観点で相違をみるこ

とができると述べている¹³⁾。

この2つの農業形態についてまとめると、まず、外インドネシアで多くみられる焼畑耕作に關しては、以下の通り限界を指摘している。

第1に、人口増加の問題に対応して休閑期間を過剰に短くすることができない。第2に、将来を見据えずに農業を行うこと。そして第3に、火を放ったときに立ち木を消失してしまう可能性のある、湿度が満たされていない土地にまで耕作範囲を拡大することである¹⁴⁾。

つまり、焼畑耕作では増加した人口に伴って、食糧を増産させることに限界があるというのである。

次にサワ耕作については、主に、内インドネシアでみられる灌漑水田を利用した農業であり、棚田は休閑期間を設けず、毎年あるいは年に2回の安定性と耐久性に優れたエコシステムであると述べている。ここでギアーツは、棚田のダイナミクスの中では水の供給と管理が重要とし、水の管理には複雑な技術を要するとともに、水利施設には資本設備への投資が必要となるという、灌漑を行わない農業との相違を示している¹⁵⁾。

次に、なぜインドネシアの農業が「内へ向かう」のかに關して述べられている。

棚田は集約化によって、(焼畑では果たせない)開拓を進めずに人口増加に対応することが可能となった。上記のように、これは焼畑では不可能であった。ギアーツは「(棚田の)システムの特徴である複雑性は、水稻農業における社会的に最も重要な特徴を生み出す¹⁶⁾」としている。

サワ農業は、地形・水資源・溶解性の栄養分を融合させた複雑な生態学的統合を可能とする地域に限定されるため、この条件を満たした一

部の地域(内インドネシア)が中心となっている¹⁷⁾。

また、水利施設を新設するよりも、(棚田の細分化など)既存の施設を発達させることで収益性が高くなり、灌漑技術の進歩によって1人当たりの生産性が上がるとしている。これに、耕作技術を加えることで棚田の収穫量を大きく増やすことが可能となる。農業技術の観点からみると、内インドネシアの広範で行われている穂摘み具を用いる方法は、二期作や三期作を可能にする¹⁸⁾。

以上のことからギアーツは、「耕作方法における労働吸収型の改良は、ジャワの農村経済がジャワ島の爆発的に増加する人口を吸収する上で、中心的な役割を果たしてきた¹⁹⁾」と述べている²⁰⁾。

そして人口増加を、サワ(集散的・膨張的)と焼畑(分散的・非弾力的)を比較することで、インドネシアの人口分布の不均等と、それに基づく社会的また文化的な困難を説明できるとしている²¹⁾。

3. インボリユーション

上記の耕作システム(特にサワ耕作)を踏まえた上で、この本で中心的な役割を果たしている「インボリユーション」についてみてみよう。

彼が用いている「インボリユーション」とは、ジャワで増加した人口が伝統的な耕作システムに吸収されたプロセスを指す。

具体的には、1920年頃のジャワ島では、増加した人口を限られた数のサワ(水田)で養うために、島民は農業資源を活用する他に選択肢はなく、労働集約的なサワ農法に追い込まれた。特に、水稻耕作は1人当たりの収入を大きく減少させずに人口を吸収することが可能なため、増

加した人口は水稻耕作へと向けられた。「インボリユーション」という言葉自体は、アメリカの文化人類学者アレクサンダー・ゴールデンワイザーから引用している²²⁾。

インボリユーションに関してギアーツは、ジャワ農民の収入が著しく減少しなかったとはいえ、「もう1つのポルトガル²³⁾」にならないよう、農業収益がオランダに流れたために、インドネシアは何も発展しなかったとしている²⁴⁾。また、「十分にインボリユーションの進んだジャワ村落の日々の生活ぶりは、他の混沌とした共同体、たとえばアメリカの都市近郊のそれに匹敵する²⁵⁾」ような表面的には豊かな社会でも実体は貧しいと述べている²⁶⁾。

ギアーツによると、インボリユーションは、「最終的に破綻をきたすプロセス²⁷⁾」であり、上手くいったようにみえて結果的には「回避すべきもの」であった。そして、これがインドネシア経済の停滞の原因となったのである²⁸⁾。

また、カルチャーシステム期の終盤（19世紀後半）から「農業のインボリユーション」を執筆していた1963年に至ってもなお、インドネシアは「停滞する経済と増加する人口²⁹⁾」を持ち合わせていると述べている³⁰⁾。

4. オランダ植民地支配下のインドネシア

ギアーツは『農業のインボリユーション』の冒頭では上記のように主にジャワの農村（農業）に関して論述しているが、それ以上に、中盤以降ではオランダがインドネシアに対して行った植民地支配を大きく取り上げ、詳細に述べている。

最初に述べたように、植民地支配がインボリユーションを生じさせ、インボリユーションが経済の停滞を招いたのである。

インドネシアは16世紀以降、(順に)ポルトガ

ル、イギリス、オランダの支配下に置かれた。また、ギアーツは、西欧企業の農村経済への介入によって、現地人の生活が企業の経済力に依存し、抜け出せなくなった「東インド会社」、「カルチャーシステム」、「法人プランテーションシステム」という政治経済的措置が、東インド植民地史の特徴であると述べている³¹⁾。

この本は、ギアーツが「工業は近代の学校である³²⁾」と述べているように、経済発展のためには工業化が必要だが、オランダの支配の特徴である東インド会社・カルチャーシステム・法人プランテーションによって、インドネシアが農業に特化していったことから、工業化できなかったという事実を明かにしている。これについては、以下で詳しく述べる。

ギアーツは、オランダ人がジャワに渡り行った植民地経済を、ジャワの伝統的な経済構造を基本的には残し、「重ね置き³³⁾」することで商品作物を栽培したものであるとしている³⁴⁾。

これは、二重経済³⁵⁾である。つまり、東インド会社の政策の目的は現地人の生活を保ちつつ、オランダがより安い価格でそれらの作物を手に入れ、次により高い価格で輸出することを当初の経済課題とした。そして、植民地インドネシアの農作物を世界市場向けに生産させ、輸出することを試みたのである。

ギアーツがインドネシアの二重経済を説明する際に「重ね置き」という表現を用いている理由は、冒頭でも述べたように、植民地経済の中で導入された農業部門の生産様式が、セイロンでの紅茶栽培のようなモノカルチュアとは異なる点を強調したかったのではないかと推測できる。なぜならば、植民地経済での「現地住民を食べさせていく」という課題が、インドネシア（少なくともサワに携わる人々）ではサワでの米

作りとサトウキビ栽培のローテーションによって解決できたからである。

次に、評者が大変興味深く感じた日本とインドネシアの比較をみてみたい。これは、ギアーツが、日本では増加した人口を都市の工業部門が吸収し、インドネシアでは農業部門に吸収されたと述べているものである。

ギアーツは、比較をする上でジャワと日本の相違点と類似点を以下のように挙げている。

まず相違点は、地理的・歴史的・文化的なものと、1人当たり所得である。

次に類似点は、人口密度の高さと、両国の農業事情(水田中心の労働集約的・農地が小さい・多種の作物に頼っている)、そして西洋との接触や国内的变化の中でも社会的文化的主義を維持できたことである。

上でも触れたように、ギアーツは、最も印象的で決定的なものが、増加した人口を日本では都市(工業)が、インドネシアでは農村(農業)が吸収したという人口吸収方法であると述べている³⁶⁾。

ギアーツは、ジャワと日本はともに所有権の基本構造・生産単位の一般的な形・農村文化の全体的なパターンがあまり変化することはないが、日本は第一次大戦まで土地当たりの農業生産性を増加させ、ジャワでは果たされなかった農業生産性も増加させた。これが一因となり、日本はインポリューションを回避でき、ジャワのような「水田決定論³⁷⁾」から逃れることができたとしている。

また資本にも注目し、「日本の農業が拡大する民族資本の工業と補完的な関係にあったのに対し、ジャワの農業は拡大する外国資本のアグロインダストリーと補完的な関係にあった³⁸⁾」と述べ、「ファン・デン・ボスがジャワの伝統

的なサワ・システムに輸出作物を押付けていた³⁹⁾」頃、日本では西洋からの干渉を断ち「商業的で柔軟な独自の農村経済⁴⁰⁾」へと向かい、農業生産性の上昇で得られた資本を工業化に向かう将来の投資のために保持されたが、ジャワでは(外国人経営の)プランテーションのパートタイム労働者を補助するために資本が使われたことで、インドネシアが離陸するための資金の利用が不可能となったとしている⁴¹⁾。

5. カルチャーシステムと法人プランテーション

5-1 カルチャーシステム

以上で触れたカルチャーシステムと法人プランテーションについて、詳しく説明したい。

これらを詳しく述べる理由は、植民地支配をみていく上で、この2つのシステムが欠かせない存在であるからだ。

まず、カルチャーシステムに関しては、東インド会社の商品作物を重視したシステムが基となり、インドネシアが苦しめられた「カルチャーシステム」が生まれたとしている⁴²⁾。

カルチャーシステムはジャワ島への集中と「内インドネシア」「外インドネシア」を形成した、そして資本集約的な西洋的部門と労働集約的な東洋部門という二重経済を確立した⁴³⁾。これは現地農業の近代化を妨げたとし⁴⁴⁾、オランダがインドネシアの農業を利益の高い作物栽培へと転換させたことは、確立していた生態系に深刻な影響を与えるだけでなく、現在(1950年代)の農業を成熟させすぎる基盤をつくったとも述べている⁴⁵⁾。

また、ギアーツは「オランダの植民地政策のもとで組織されたジャワの土地と労働が創出された⁴⁶⁾」としながらも、「ファン・デン・ボスの真の悪意は、インドネシアを無力化することに

あった⁴⁷⁾と述べている。

そして、「『オランダでは富が増加し、インドネシアでは人口が増加する』という言いならわしが初めて社会的な現実になったのは、まさにカルチャーシステム期である⁴⁸⁾」としている。

5-2 法人プランテーション

「開発」を進める上で、農民の力でエスレート経済を確立することがカルチャーシステムの目的であり、社会資本の形成、プランテーション作物の強制普及と労働技術の普及、そして政府の補助金政策によって私企業が増大した。このことから、カルチャーシステムが衰退し、「法人プランテーション」への移行⁴⁹⁾につながった。

そして、私企業が十分な利益をあげるようになったことで、砂糖精製分野への投資が可能となった。技術改良をすることなく、限界の見えるコーヒーとは異なり、時間・資本・技術革新を要する砂糖の生産と発展は、軌道に乗れば拡大しつづけることが可能となり、近代的な灌漑設備の誕生がそれを後押しした⁵⁰⁾。

19世紀後半、砂糖業の急速な機械化によってカルチャーシステムが衰退した。そのため「個人農園主」から、オランダをはじめとするヨーロッパ諸国の大規模な多角的企業である「有限会社」へ、1910年までに国家商業主義は「法人企業」へと置き換えられた⁵¹⁾。インボリューションは「分配」に関しても影響を与えている。ジャワは、経済的パイを細分化することで「比較的高い社会的経済的同質性を維持⁵²⁾」し、極端な差が生じていない代わりに全体的に貧しさが漂うこの過程をギアーツは「貧困の共有⁵³⁾」と呼んでいる。

おわりに

最後に、この本に対する評者の見解をまとめておきたい。

「インボリューション論」は、ギアーツが「研究自身が独自の人生を持つようになった」とし、更に批判に対する論文を執筆しているという点からいえるように、広く用いられながらも、多くの批判を受けている。

「インボリューション論」に関するサーベイ論文として、広く用いられている加納啓良の論文によると、『農業のインボリューション』が今日(1979年現在)もインドネシア研究に携わる研究者に大きな影響を与えているとし、オランダの植民地化以後のジャワ経済史としてのこの本の業績を評価する一方で、ギアーツの概念枠組みでは、近年のインドネシアをとらえきれないという批判が多いことを紹介し、この見解に賛同している⁵⁴⁾。

また、ブーケとギアーツの議論の意義について、「『移入された資本主義』と強制的に結合された『自給的農民経済』⁵⁵⁾」を把握するための、理論装置を提示した点であるが、「もっぱらジャワの稲作農業・農村の変容過程に対する、分化生態学的観点からの経済史的考察に、議論を収れんさせている⁵⁶⁾」と批判し、「水田稲作の生態学的特性⁵⁷⁾」を強調したことで、「自給的農民経済」の柔軟な認識を妨げたとしている⁵⁸⁾。

しかし、加納の示した批判には疑問が残る。それは、近年、「インボリューション論」に関する論文を執筆した大橋厚子も述べているように、ギアーツの主張と彼に対する批判にはタイムラグがあるという点である。

若き日のギアーツが初めてフィールドに立って(1950年代)から十数年後、1969年よりインドネシアでは第一次開発五カ年計画が始まり、食

糧増産政策(緑の革命)が導入された⁵⁹⁾。これを受けて、1970年代以後に「現状が説明できない」や「たまたま停滞していたときの研究である」という批判が出るのだが、このような批判は納得できるように、どうも賛同できない。

たしかに、この本の原点は、ある農村のほんの一時の観察かもしれないが、そこから植民地支配という大きな根本原因をつきとめ、論証したギアーツを評価したい。

ギアーツは本文の最後で、インドネシアの沈滞を正確にとらえるには「生態学的、経済学的過程をはるかに超え、国の政治的、社会的、文化的ダイナミクスを調べなければならない⁶⁰⁾」と述べており、最初に紹介した原の「ギアーツの出発点」やギアーツの記した「序章的な研究」という記述からもいえるように、この本は多くのギアーツ作品の序章に過ぎない。

そのため、一般にいわれる「社会」や「文化」というギアーツの中心課題は感じられない。しかし、繰り返しになるが、途上国研究を行う上で植民地支配国と途上国の両方を見渡す姿勢は新鮮で、モノカルチュアだけが強制裁培ではなく「重ね置き」というものが存在したという事実は評者にとって大きな発見であった。

この本を通じて、若き日のギアーツの途上国研究に対する情熱を感じ取ったように思う。

注

- 1) 1952～59年の間にフィールドワークを実施(池本幸生訳、25頁)。ギアーツは1952年に初めて東部ジャワのパレを訪れた(池本幸生訳、9頁)。
- 2) 池本幸生訳、25頁。
- 3) 原は、ギアーツの研究が経済学的要素を含んでいると述べており、『クリフォード・ギアーツの経済学—アジア研究と経済理論の間で』という本を執筆している(原1985)。
- 4) 池本幸生訳、7頁。
- 5) 池本幸生訳、284頁。
- 6) 池本幸生訳、40頁。
- 7) 池本幸生訳、42頁。
- 8) 池本幸生訳、42頁。
- 9) 池本幸生訳、45頁。
- 10) 上記の「外的生理機能」とは、ヘッケルが称した「生態系のさまざまな要素間でパターン化したエネルギーの交換(池本幸生訳、43頁)」のことである。また、ギアーツによるとこれは「自然のバランス(池本幸生訳、43頁)」と言い換えることができ、生態系の中に人間を含めても基本原則の性質は変化しない(池本幸生訳、43頁)。
- 11) Geertz 1963、6頁。
- 12) 池本幸生訳、45頁。
- 13) 池本幸生訳、54頁。
- 14) 池本幸生訳、65頁。
- 15) 池本幸生訳、68-70頁。
- 16) 池本幸生訳、72頁。
- 17) 池本幸生訳、73頁。
- 18) 池本幸生訳、74頁。
- 19) 池本幸生訳、76頁。
- 20) 池本幸生訳、76頁。
- 21) 池本幸生訳、77頁。
- 22) 池本幸生訳、120頁。
- 23) 池本幸生訳、120頁。
- 24) 池本幸生訳、120頁。
- 25) 池本幸生訳、144頁。
- 26) 池本幸生訳、142-144頁。

- 27) 池本幸生訳、120頁。
- 28) 池本幸生訳、174頁。
- 29) 池本幸生訳、112頁。
- 30) 池本幸生訳、112頁。
- 31) 池本幸生訳、92頁。
- 32) 池本幸生訳、182頁。
- 33) 池本幸生訳、89頁。「重ね置き」に関してはこの本の訳者である池本幸生が「訳者解説」の部分で分かりやすくまとめている(池本幸生訳、282頁)。
- 34) 池本幸生訳、89頁。
- 35) ギアーツは二重経済についてJ.H.ブーケの見解に依拠している。ブーケは二重経済という用語について「二つの完全に成熟した社会様式が同時に存在して明確な分裂を示しているような社会に適用するもの(永易浩一訳、13頁)」と述べている。
- 36) 池本幸生訳、172-173頁。
- 37) 池本幸生訳、174頁。
- 38) 池本幸生訳、176頁。
- 39) 池本幸生訳、177頁。
- 40) 池本幸生訳、177頁。
- 41) 池本幸生訳、177頁。
- 42) 池本幸生訳、94頁。
- 43) カルチャーシステム期には、米とのローテーションでサワにて育てる一年生作物(砂糖《主にジャワ島で栽培》など)と、サワでは栽培できない多年生作物(コーヒー《主に外島で栽培》など)の作物の栽培が導入された(池本幸生訳、96頁)。
- 44) 池本幸生訳、95頁。
- 45) 池本幸生訳、96頁。
- 46) 池本幸生訳、111頁。
- 47) 池本幸生訳、111頁。
- 48) 池本幸生訳、112頁。
- 49) かつてジャワの発展を妨げていた不十分であった輸出経済インフラが整ったことで、それまで資金不足で成立不能であった民間企業が成立できるようになったことが要因であり、それは内発的に起こった(池本幸生訳、107頁)。
- 50) 池本幸生訳、107頁。

- 51) 池本幸生訳、126頁。
- 52) 池本幸生訳、138頁。
- 53) 池本幸生訳、138頁。
- 54) 加納(1987a)、64-92頁。
- 55) 加納(1987b)、180頁。
- 56) 加納(1987b)、160頁。
- 57) 加納(1987b)、180頁。
- 58) 加納(1987b)、180頁。
- 59) 宮本、259頁。
- 60) 池本幸生訳、192頁。

参考文献

- 大橋厚子(2006)「アグリカルチュラル・インボリューション論と勤勉革命—日本との較におけるジャワ島の近代」、名古屋大学大学院国際開発研究科、Discussion Paper, No.140。
- 加納啓良(1987a)「農業インボリューション論批判—ジャワ農村経済史研究の視座転換」、東南アジア研究会編『社会科学と東南アジア』、勁草書房、64-105頁。
- 加納啓良(1987b)「『二重経済』と『農業インボリューション』を超えて—『農民的自給生産』再考」、東南アジア研究会編『社会科学と東南アジア』、勁草書房、148-187頁。
- ギアーツ、クリフォード著 池本幸生訳(2001)『インボリューション—内に向かう発展』NTT出版。
- 原洋之介(1985)『クリフォード・ギアーツの経済学—アジア研究と経済理論の間で』、リポート。
- 宮本謙介(2003)『概説インドネシア経済史』、有斐閣。
- Boeke, J.H (1953), *Economics and Economic Policy of Dual Societies: As Exemplified by Indonesia*, Institute of Pacific Relations. ブーケ、J.H.著 永易浩一訳『二重経済論—インドネシア社会における経済分析』、秋葉書房、1979年。
- Geertz, Clifford(1963), *Agricultural Involution* :

The Processes of Ecological Change in Indonesia, University of California Press. ギアーツ、クリフォード著 池本幸生訳『インボリユーション—内に向かう発展』(NTT出版、2001年)に所収。

Geertz, Clifford (1984), "Culture and social change : the Indonesian case", *MAN* , New Series, Vol.19, No.4, December 1984. ギアーツ、クリフォード著 池本幸生訳『インボリユーション—内に向かう発展』(NTT出版、2001年)に所収。

Geertz, Clifford (1995), *After the Fact : Two Countries, Four Decades, One Anthropologist*, Harvard University Press.